

Title	『寓話選』：ある日本生まれの版（1）：ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ
Sub Title	Fables choisies illustrées par des artistes japonais 1 : Jean de La Fontaine
Author	高山, 晶(Takayama, Aki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.32 (2001. 3) ,p.103- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20010331-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『寓話選』——ある日本生まれの版——

(I) ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ

高 山 晶

J.-P. コリネが指摘しているように、「寓話」というジャンルは、元来挿絵を必要とする伝統を持っており¹、どのような形態にしる挿絵が付けられて始めて「書物」として完成するものである。したがって、「寓話集」「寓話選」は、必然的に「読む書物」であると同時に「見る書物」²でもあるのだ。言葉と絵画のクロスオーバーなのである。それは、画家が新たな挿絵を描き、新たな版が出版される度に生まれ変わることでできる、「文学」作品であるとともに「美術」作品なのではないか。あるテキストに挿絵が描かれるということは、平面空間の芸術が言葉の芸術に新しい命を吹き込むことになる、とすることができるかもしれない。何世紀にも渡って、数多くの挿絵が描かれてきたテキストは、各々の時代の画家たちに想像力を与え続け、新たな「文学×美術」作品の誕生を促すようなエネルギーを秘めていたのである。そこに生み出された「文学×美術」作品は、その時代に生きた人々を証言し続けてきたということにもなる。そして当然その証言は、時代を表すとともに、テキストの作者と挿絵を描いた画家のみならず、その版つまりその「書物」を編纂し上梓した人、テキストと挿絵の出会いを演出した「人」をも現わし、語っているにちがいない³。

(I)

ジャン・ド・ラ・フォンテーヌの『韻文で書かれた寓話選』は、フランス文学作品の中で、最も多くの挿絵が描かれた作品ではないかと云われている。1668年にパリで刊行された初版⁴以来、主な版のみを挙げてみても、フラン

ソワ・ショヴォー、ジャン=バティスト・ウドリー、J.-J.グランヴィル、ギュスターヴ・ドレ、プテ・ド・モンヴェル、そして20世紀にはバンジャマン・ラビエ、ジュール・シャデル、ジャン・リュルサ、マルク・シャガール、マリー・ユーゴなどが挿絵を描いていて、網羅するにはその数はあまりにも多い。ここでは、数多くのラ・フォンテーヌ『寓話選』の中でもひととき異彩を放つ、19世紀末に日本で生まれた版をとりあげて検討してみたい。A.-M.バシーはその著書『ラ・フォンテーヌ寓話 挿絵の4世紀』の中で、この版を「とりわけ独創的な版」と語り⁵、後述するようかなりのページ数を割いているし、G.I.カーソンは、彼自身の所蔵していた2500点にのぼる寓話集コレクションの中から選び抜いた、9点の特筆すべき出版物のひとつとして挙げている⁶。

1894年（明治27年）は、すでに7月から日清戦争が始まっていた。その年の秋、東京市京橋区築地で、ピエール・バルブトー監修の『ラ・フォンテーヌ寓話選—東京最良の絵師団による挿絵付き—』が出版される。テキストはフランス語で、28のラ・フォンテーヌの寓話に、5人の日本人画家による28枚の挿絵が付けられている。束ねた絹糸で「大和綴」に綴じられた、2巻からなる欧文和装本である⁷。

まず、この書物の輪郭をなぞってみよう。

タイトル・ページ（扉）は次のようになっている。

*CHOIX DE FABLES / DE / LA FONTAINE / ILLUSTRÉES PAR
UN GROUPE / DES / MEILLEURS ARTISTES / DE TOKIO. /
sous la direction / de / P. BARBOUTAU. / TOKIO / M DCCC
XCIV. / Imprimerie de Tsoukidji-Tokio, / S. MAGATA, Directeur.*

表紙には、第1巻、第2巻とも梶田半古の同じ画が使われている。（図版1）第2巻の表紙には左上に2つ星印が入っているがこれが唯一の相違点である。その画には、前景に小川が流れ、遠景には富士らしき山が描かれてい

て、「FABLES CHOISIES DE LA FONTAINE」と書かれた「立て札」が書名を示している。左下にはE. FLAMMARION Éditeurと入っていて、この版にはフラマリオン社が一枚噛んでいたことがわかるが、フラマリヨンの名は、扉にも奥付にもなくこの部分にしか出てこない⁸。半古の表紙画のいちばんの特徴は、そこに夥しい数の動物が描かれていることである。カエル、魚、海老（ザリガニ?）、カケス、カモ、サギ、鶉、ツバメ、クジャク、オンドリ、カラス、ハト、スズメ、鶴（コウノトリ?）、名はわからないが猛禽類（トンビ?）他の鳥たち。さらに、カメ、ウサギ、キツネ、オオカミ、そして中央に牛。よく見るとネズミもいるし、ネコは木に登り、サルも木にしがみついている。セミとアリも描き込まれているようにも見える。海の景色がないのでイルカと牡蠣は見あたらないが、まさにこの『寓話選』のテキストに登場する動物たち全員集合の感がある。しかし、人間は描かれていない。後にふれるが、この表紙画はこの版の大きな特徴を象徴的に表しているようだ。

見返しを見ると、ナンバー入りの版は鳥の子紙と奉書紙に全部で350部刷られたことがわかる。さらにその下に、和紙はその紙質から両面印刷ができない等、ことわり書きも付けられている。

Il a été fait de cet ouvrage un tirage sur / papier Japonais de luxe.
 150 exemplaires sur Tori-no-ko. (qualité extra.) N^{os} 1 à 150.
 200 idem sur Hô-sho. N^{os} 151 à 350.
 350 exemplaires, numérotés.

Le texte de ces trois cent cinquante exemplaires a dû être imprimé sur papier, Hô-sho, le Tori-no-ko étant trop épais pour être plié. Le papier Japonais, à cause de sa composition, ne peut être imprimé que d'un côté.

次に、奥付を見てみる。

明治廿七年九月二十日印刷

明治廿七年九月三十日発行

著作者 佛国人 馬留武黨 東京市築地居留地五十一番館

編輯者 発行者 印刷者 曲田成 東京市京橋區築地二丁目十七番地

監督者 野村宗十郎 東京市京橋區築地一丁目二十番地

印刷所 株式會社 東京築地活版製造所 東京市京橋區築地二丁目十七番地

畫工 梶田半古

狩野友信

岡倉秋水

河鍋曉翠

枝貞彦

木版工 木村徳太郎

じつは、この欧文和本には少なくとも2種類の異なった型とサイズのものがある。「平紙本」の版と「縮緬本」の版である。(平紙本版のサイズはおおよそ25×18.5センチ、縮緬本版は20×15センチ)そして、ここにあげた印刷・発行の日付は、平紙本版全2巻および、縮緬本版第1巻のもので、縮緬本版の第2巻は「明治廿七年十月十日印刷 明治廿七年十月二十日発行」となっており、印刷、発行の日付が20日ほど遅れている。

ここで、「縮緬本」についての説明が少し必要になるので、アン・ヘリング著「縮緬本雑考」「続縮緬本雑考」⁹から引用、要約する。まず、「縮緬」とは絹の布のことではなく、縮緬に似た感触を与えるように加工された紙(縮緬紙=crepe paper=crépon)のことである。このように加工をほどこされた紙で作った本が「縮緬本」であるが、このような本の多くは明治18年以降に発行された輸出むけの欧文和本であった。そのなかで最もよく知られているのが、長谷川武次郎の「日本昔噺」シリーズなので、このへんから「縮緬

本」すなわち「日本昔話の横文字再話」、という思い込みが生じてしまう。その結果、縮緬紙製ではないにもかかわらず、このジャンルの出版物を「縮緬本」と呼ぶことがある。したがって、このような広義の「縮緬本」には少なくとも次の4種類の異なったタイプのものが含まれる。

(A) 表紙、本文とも色摺りで、総縮緬仕立てのもの（サイズは縮めた分小さくなる）

(B) 総色摺りであるが、地紙は縮緬加工されていないもの

(C) 表紙、裏表紙のみ色摺りで本文は墨摺りのもの

(D) 表紙も無地で、本文も墨摺りの質素なもの

狭義の本格的「縮緬本」は(A)のみで、いわばデラックス版である。(B)は中間型で(C)と(D)は縮緬加工とは無関係である。(D)は日本国内で外国語の教材などに使用されたい。「日本昔噺」シリーズは(C)(D)にあたる「非縮緬本」のほうが数は多く、アン・ヘリングはその連載を「縮緬本雑考」ではなく「明治欧文草双紙雑考」とするべきであったかもしれない、と書いているくらいである¹⁰。

さて、問題のラ・フォンテーヌ『寓話選』は云うまでもなく「日本昔話の横文字再話」ではないが、外形からこの分類に当てはめると、少なくとも次のような版が2種類現存する。ほぼ(A)型に相当する「本格的な総縮緬仕上げで、表紙と挿絵は色摺り、テキスト部分は墨摺り」の版と、(B)と(C)の中間型ともいえる「非縮緬本、つまり平紙本であるが、表紙、挿絵とも色摺り、テキスト部分は墨摺り」の版である。これら2種類の版の相違点は、平紙であるか縮緬紙であるかという、紙質のみのようだ。無論この紙質のせいで、前記したようにサイズは縮緬本版のほうが小さくなっている。(A)型の総縮緬本に関しては、フランス国立図書館で参照した版⁷と手元の版に大きな違いは見付からないが、「少なくとも2種類」とことわったのは、このような和装本はときに、一冊一冊、型もサイズも摺りも異なっていることがあるからである。上記の、縮緬本の版第2巻のみに見られる印刷日と発行日の20日間の遅れは、おそらく、まず平紙本の版が刷られ、そのあとで特殊加工をほどこして縮緬本の版が作られたが、縮緬本の第1巻まで完成

してから、なんらかの事情で間隔が開いてしまって、第2巻のみ印刷・発行の日付を遅らせた奥付を刷り直した（あるいは刷り増した）せいであろう。いずれにしても、平紙本よりも縮緬本のほうがあとで製作されたのではないか。この時代の出版物は必ずしも、印刷、発行の日付が正確ではないが¹¹、この場合、すぐ後でふれる序文の日付が「1894年9月」となっていることから、信憑性が高いと考えられる。

ここまでは、この書物を外側から、表紙、見返し、扉、そして奥付と観察してきたが、そろそろページをめくってみよう。第1巻には序文がついている。この序文に著者名はないが、奥付の「著作者 馬留武黨」つまりピエール・バルブトー（Pierre Barboutau）であることはまず間違いない。少し長くなるが、謎の多いこの出版物について多少なりとも情報を与えてくれる序文なので、冒頭と最後の部分を引いておきたい。

Le choix des fables de LA FONTAINE, que nous offrons au Public, est surtout basé sur la plus ou moins grande difficulté que nous avons rencontrée à traduire le sens de ces fables aux artistes Japonais, qui ont bien voulu nous prêter leur concours pour les illustrer, chacun selon le style de l'Ecole à laquelle il appartient, et qu'un long séjour, parmi eux, nous a permis d'apprécier.¹²

[...] ¹³

Est-il nécessaire d'ajouter que nous n'avons reculé devant aucun sacrifice pour offrir aux amateurs à qui ce premier essai s'adresse une oeuvre digne de notre grand Fabuliste et des éminents artistes Japonais, qui ont bien voulu nous prêter leur concours ; nous leur adressons ici nos bien sincères remerciements(sic), et nos félicitations.

Notre but, en publiant cet ouvrage, est de faire connaître à ceux qui s'occupent de cette branche si intéressante de l'Art du dessin, le genre dont nous sommes absolument redevables à cette pléiade d'Artistes

Japonais dont les *Séshiou*, les *Kanô*, les *Kôrin*, dans le passé ; les *Ôkio*, les *Outamaro*, les *Hokousai*, les *Shiroshighé*, dans une époque plus rapprochée de nous, sont les coryphées, et dont les oeuvres remarquables sont de plus en plus appréciées par les Artistes de tous les pays et de toutes les écoles.

Tokio, Septembre 1894.

この序文から読みとることのできる点を次に挙げてみる。

第1段落：挿絵を付ける日本人の画家に、意味を理解してもらえような寓話を選ばざるを得なかったこと、その際に多かれ少なかれ困難がともなったこと。この文の著者が、それらの画家たちのところに「長く滞在」した結果、彼らを高く評価したこと、である。

この版のために、全2巻で合わせて28の寓話を選ばれているが、およそ240あるラ・フォンテーヌ寓話から、相当数をしばって厳選したことになる。次に、「長い滞在」(un long séjour, parmi eux) という記述については、正確にどの程度の期間だったのかは今のところ不明である。バルブトーの初来日は、アンリ・ヴェヴェールによると1886年(明治19年)であるが¹⁴、このはじめての滞在が、一度もフランスに帰国することなく、1894年まで続いたとは考えにくい。何故なら、バルブトーは1886年の初来日から、1913年の4回目まで最後の滞在¹⁵までに「計7年間」日本に滞在した¹⁶からである。1886年から、この版の出版された1894年まで滞在すると、すでに足掛け8年となってしまう、註16にあげたヴェヴェールの記述と矛盾してくる。そのうえ、1893年にはバルブトーの著書 *Catalogue descriptif d'une collection d'objets d'art, rapportés de son voyage au Japon, par Pierre Barboutau* がパリで出版されている。2回目、3回目の来日がいつであり、どのくらいの期間に渡っていたのか詳細はわからない。今のところ、日本で見つけることのできた唯一の記録は、バルブトーの名前が1896年5月31日に横浜港を出港したフランス汽船カレドニアン号の乗客名簿に載っていることだけである。¹⁷

第2段落：「偉大な寓話作家(ラ・フォンテーヌ)および、卓越した日本の

芸術家たち」にふさわしい作品に仕上げるために、いかなる犠牲をもはらう覚悟で一步も引かなかったこと。「この最初の試み」(ce premier essai)が「美術愛好家」(amateurs)に向けられていること、である。協力者への謝意と褒めことばも付いている。

「最初の試み」という記述は1894年9月の時点ですでに、1895年夏から秋にかけてに出版される次の企画 *FABLES CHOISIES DE J.-P. CLARIS DE FLORIAN*¹⁸ が軌道にのっていたことを暗示している。さらに“amateurs”とは、註13に送った序文中程の狩野友信の紹介部分に出てくる“Amateurs d'Art”を指していることから、この出版物が、たんなる「児童書」や「横浜みやげ」ではなく、始めからフランスの美術愛好家を読者・挿絵鑑賞者として想定していたことは明らかである。

第3段落：この作品を世に出す目的は「素描を基礎とする造形芸術のこの分野に関心のある人々に、日本の画家たちの独断場であるこのジャンルを知ってもらふことにある」こと。そして、古くは雪舟、狩野派、光琳から、応挙、歌麿、北斎、広重の名をあげ、彼らの作品が近年ますます世界の国々の、そしてあらゆる流派の芸術家から高い評価を与えられている、と結んでいる。

この序文最後の部分は、室町時代の画僧から始めて狩野派、琳派、丸山派と日本絵画史を概観してみせているが、やはり「歌麿、北斎、広重」と続く3つの名前が「浮世絵」に重点がおかれていることを語っている。ラ・フォンテーヌのテキストのほうは、日本の絵画を紹介するためのきっかけにすぎなかったのではないか、という印象さえ与える。

1914年に出版されることになるバルブトーの著書『日本の庶民絵師たち』(*Les peintres populaires du Japon*)の序文にヴェヴェールが書いている「彼(バルブトー)のお気に入りの(浮世)絵師たち」(*ses peintres préférés*)¹⁶は20年間変わらなかったのである。

次に、どのような寓話がこの版のために選ばれたのか、どの画家が挿絵を描いているのか、巻末の目次を見てみよう。¹⁹

TABLES DES FABLES.

CONTENUES DANS LE PREMIER VOLUME.

- I ...LA CIGALE ET LA FOURMI. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
II...LE CORBEAU ET LE RENARD. Illustrée par *Kawa-nabé Kiyō-soui*.
III...L'HIRONDELLE ET LES PETITS OISEAUX. Illustrée par *Kawa-nabé Kiyō-soui*.
IV...LA GRENOUILLE QUI VEUT SE FAIRE AUSSI GROSSE QUE LE BOEUF. Illustrée par *Oka-koura Shiou-soui*.
V...LE DRAGON À PLUSIEURS TÊTES ET LE DRAGON À PLUSIEURS QUEUES. Illustrée par *Oka-koura Shiou-soui*.
VI...LE RENARD ET LA CIGOGNE. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
VII...LE COQ ET LA PERLE. Illustrée par *Kanō Tomo-nobou*.
VIII...LE LOUP PLAIDANT CONTRE LE RENARD PAR-DEVANT LE SINGE. Illustrée par *Oka-koura Shiou-soui*.
IX...LE CHÊNE ET LE ROSEAU. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
X...LES DEUX TAUREAUX ET LA GRENOUILLE. Illustrée par *Oka-koura Shiou-soui*.
XI...L'OISEAU BLESSÉ D'UNE FLÈCHE. Illustrée par *Kawa-nabé Kiyō-soui*.
XII...CONSEIL TENU PAR LES RATS. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
XIII...LE RENARD ET LES RAISINS. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
XIV...LE GEAI PARÉ DES PLUMES DU PAON. Illustrée par *Kanō Tomo-nobou*.

CONTENUES DANS LE SECOND VOLUME.

- I ...LE COQ ET LE RENARD. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
II...LE LIÈVRE ET LES GRENOUILLES. Illustrée par *Oka-koura Shiou-soui*.

- III...LE SINGE ET LE DAUPHIN. Illustrée par *Oka-koura Shiou-soui*.
- IV...LE LOUP ET LA CIGOGNE. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
- V...LA COLOMBE ET LA FOURMI. Illustrée par *Kawa-nabé Kiyō-soui*.
- VI...LA GRNOUILLE ET LE RAT. Illustrée par *Kanō Tomo-nobou*.
- VII...LE RENARD AYANT LA QUEUE COUPÉE. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
- VIII...LE SOLEIL ET LES GRENOUILLES. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
- IX...LE RAT ET L'HUÎTRE. Illustrée par *Eda Sada-Shiko*.
- X...LE HÉRON. Illustrée par *Kanō Tomo-nobou*.
- XI...L'ÉCREVISSE ET SA FILLE. Illustrée par *Eda Sada-Shiko*.
- XII...LE RENARD ET LE CHAT. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
- XIII...LA TORTUE ET LES DEUX CANARDS. Illustrée par *Kadji-ta Han-ko*.
- XIV...LES POISSONS ET LE CORMORAN. Illustrée par *Kanō Tomo-nobou*.

この目次に登場するのは、第1巻-IXの「カシの木とアシ」と第2巻-VIII「太陽とカエルたち」の「太陽」を除くと、(第1巻-Vの「リュウ」のような想像上の動物もいるが)すべて動物である。「動物大集合」の目次なのだ。このような動物づくしの選択が、梶田半古の表紙画に象徴的に描き出されていたというわけである。

ところで、「寓話」というジャンルには、擬人化された動物の登場が当然のようなイメージがあるが、ラ・フォンテーヌの『寓話詩』に関する限りそう言い切れるわけではない。巻の一から巻の十二まで、およそ240の寓話が数えられるが、そのうち動物の姿を借りずに「人間」が登場する寓話は、「神々」を含めると100近くになる。つまり総数の約4割に「人間」がダイレ

クトに登場していて、人間くさいお話がけっこう多いのだ。

ところが、この日本生まれの「バルブト版」の目次には、人間はひとりとして載っていない。人間があまり登場しない寓話のみが選ばれている。このような選択がバルブトのものなのか、それとも挿絵を付けた日本人画家のものなのかは興味深い問題であるが、序文中の河鍋暁翠の紹介部分¹³に、暁翠が「カラスとキツネ」の挿絵を描くことを「選んだ」とあったことを考えると、両者の折り合った結果なのだろう。序文冒頭でバルブトが書いているように、寓話の意味を挿絵の描き手に理解してもらうのが多かれ少なかれ難しかったのであるから、画家が話の筋を納得できるような寓話だけを選ばなければならなかったことは確かである。このように、日本人画家と「佛国人 馬留武黨」の二重の選択の結果、動物が圧倒的な比重を占める寓話が採用されたことが、まずこの版の決定的な特徴となったが、それらの寓話に付けられた挿絵の中でも、自然のなりゆきとして、人間の影は薄い。人影の描かれている挿絵は全部で7枚あるが、主人公の動物たちを傷つける敵役であったり（第1巻-XI「矢に傷ついた鳥」、第2巻-V「ハトとアリ」）、寓話の筋の展開を説明するために小さく、ときには米粒ほど小さく描かれた人影だったり（第1巻-III「ツバメと小鳥たち」、第2巻-II「ウサギとカエル」、III「サルとイルカ」、XII「キツネとネコ」）、あるいは、第2巻-XIII「カメと2羽のカモ」のように、主役の動物たちを口をあんぐり開けて眺めている群衆だったりする。およそ主役には程遠い存在なのである。

次に、バルブト版に採用された寓話のうち「人間」のイメージが描かれている挿絵を中心に、初版の挿絵画家ショヴォーの挿絵と、バルブト版の日本人画家の挿絵を較べてみたい。（ショヴォーの挿絵はCh.、バルブト版の挿絵はBar.と略す）¹⁹

第1巻-I 「セミとアリ」

Ch. テクストには登場しない「人間」が3人描かれ、焚火を囲んでいる。コリネによれば、これらの人影は人間界の「セミ」をあらわしている²⁰。／
Bar. 人間は描かれていない。

第1巻-III 「ツバメと小鳥たち」

Ch. ほぼ画面中央に種まく人がいて、鳥たちの姿は小さい。(図版2) /
Bar. 河鍋暁翠の挿絵では、数多い小鳥が前面に配され、人影は遠い。(図版3)

第1巻-V 「多くの頭をもつリュウと多くの尾をもつリュウ」

Ch. 右上の砦の上に小さく人影。 / Bar. 人影なし。

第1巻-VI 「キツネとコウノトリ」

Ch. 動物たちの前におかれた、ナフキン上の皿とナイフが、人のにおいを感じさせる。 / Bar. 梶田半古の挿絵に人の気配はない。

第1巻-VIII 「サルをまえにして争うオオカミとキツネ」

Ch. 「サル」は人に尾を付けただけで、人間のイメージに近い。 / Bar. 岡倉秋水の挿絵には「動物」らしい「サル」が描かれている。

第1巻-XI 「矢に傷ついた鳥」

Ch. 右前景に矢を射る人。鳥は遠く空に飛ばせている。(図版4) / Bar. 暁翠の挿絵にも射手は登場するが「傷ついた鳥」が前景に大きくクローズアップされている。(図版5)

第2巻-II 「ウサギとカエル」

Ch. 人間は登場しない。 / Bar. 秋水の挿絵にはごく小さいが人と犬が見える。この挿絵が、初版にない人影がバルブト版のほうに描かれている唯一の例外である。

第2巻-III 「サルとイルカ」

Ch. 遠くの岸辺に人が数人。 / Bar. 秋水の挿絵には、溺れている人が3人。

第2巻-V 「ハトとアリ」

Ch. 左側に大きく、弓に矢をつがえる人。(図版6) / Bar. 暁翠の挿絵にも「ハト」の敵役の人間は登場するが、Ch. よりもはるかに小さい。(図版7)

第2巻-VIII 「太陽とカエルたち」

Ch. 「太陽」は神の姿(太陽神の子パエトーン?)となり、女神とともに何頭もの馬に引かせた二輪車に騎って空をかけている。「神とは、人間の姿

を基に作られたイメージ」²³であるなら、最も高いヒエラルキーの人影が圧倒的な迫力をもって描かれていることになる。(図版8) / Bar. 半古の挿絵に人影はなく、何匹ものカエルが照りつける「太陽」を眺めている。(図版9)

第2巻-IX 「ネズミとカキ」

Ch. 浜辺に人間が2人、海上の舟にも数人の人影。 / Bar. 人影なし。

第2巻-XII Bar. 「キツネとネコ」(Ch. 「ネコとキツネ」)

Ch. 左上に狩りをする人が数人描かれている。 / Bar. 半古の挿絵にも狩人は登場するが小さい。

第2巻-XIII 「カメと2羽のカモ」

Ch. 5人の人間が空を見上げて「カメと2羽のカモ」を見ている。(図版10) / Bar. 人数としては半古の挿絵のほうが多いが、前記のように群衆として描かれているので、「人間」の存在感はCh. よりも軽やかな印象を与える。(図版11)

テキストに「人間」がほとんど登場しない寓話に付けられた挿絵であるにもかかわらず、1668年の初版では、人のイメージがかなりの比重を占めていて、「人間を、ラ・フォンテーヌの世界の中心、自然のヒエラルキーの揺るぎない頂点に据えている」²¹ ショヴォーの視点がわかる。とともに、挿絵に描かれた対象を通して、ルイ14世治下の揺るぎの少ないヒエラルキーが透いて見えるようだ。この初版の対蹠地にあるのがバルブト版である。A.-M.バシーは、人間のイメージが、1880年頃から19世紀末までに出版されたラ・フォンテーヌ寓話詩の挿絵から消えてしまうことに注目して、これを«la crise de l'homme»と呼び、バルブト版をその最も顕著な現われとしてとらえている。バシーは、28枚の挿絵に登場する動物を数えあげ、分類して(哺乳類46、鳥類57、魚類・爬虫類・水辺に住む動物79、昆虫類3)、「人間から最も遠い生命の形態」つまり「鳥類および魚類・爬虫類・水辺に住む動物」の圧倒的な数に着目して、この版に«la crise de l'homme»の頂点を見ている²²。そこでは挿絵に描かれたイメージに関する従来のヒエラルキーが崩壊

して、いわば下剋上が起こっているのだ。このように、人間の影が限りなく薄くなり、哺乳類ですらない動物たちに占領されてしまって、妙に静かな佇まいを見せる『寓話選』は、初版以来フランスで出版され続けてきた、人間中心の、おせっかいで、弁舌さわやかなラ・フォンテーヌ寓話のイメージからはずいぶんと遠ざかってしまっていることは確かである。どのような方角に向かって遠ざかったのか？言うまでもなく、東の方角。そのときのキーワードは「ジャポニスム」なのかもしれない²³。そして、東に向かう『寓話選』の航海の水先案内人は、「日本美術に惚れ込んだために、人生がすっかり変ってしまった」¹⁴ フランス人、ピエール・バルブトであった²⁴。Pierre Barboutauは1862年にジロンド県に生まれ、1916年にパリで亡くなっている。²⁵（図版12）

続編では、ラ・フォンテーヌの場合と同様、奥付に「著作者」として「佛国人 馬留武黨」と記されているフロリアンの『寓話選』¹⁸を紹介するとともに、これらの「書物」の誕生を演出した「人」についても、限られた資料の範囲内であるが、ふれてみたいと思う。

註

1. Les *Contes* ont tous paru d'abord sans illustrations : ils n'en reçurent que par la suite. Il n'en va pas de même pour les *Fables*, qui se présentèrent d'emblée comme une œuvre illustrée. Les vignettes dont s'ornaient celles des six premiers livres dans le somptueux in-quarto de 1668 ne constituaient nullement une invention : en France, dès le Moyen Âge, les ysojets manuscrits comportaient des miniatures, dont la tradition se perpétue, après l'invention de l'imprimerie, [...] (Jean-Pierre Collinet, "La Fontaine et ses illustrateurs" in *Œuvres complètes Fables Contes et Nouvelles* de La Fontaine, Bibl. de la Pléiade, 1991, t. I, p. LXIII)
2. 書物を便宜上「読むもの」と極めて、[...] 叙述を続けて来たが、それには例外がある。「読む書物」の外に「見る書物」がある。（森銑三「書物甲篇」初版昭和19年、『書物』岩波文庫1997, p. 138）
3. あらゆる書物は人の手に成ったものである。神意や天啓を伝えたものがあるにしても、書物に化する一段になれば人の手を煩わさなければならぬ。だ

から書物はなによりも人間に似ている。

人の書物を作る目的は一樣ではない。しかしその目的の如何にかかわらず、書物は著者その人を現しているから妙である。(柴田宵曲「書物乙篇」、*ibid.* p. 331)

4. *Fables choisies mises en vers* par M. de La Fontaine, Paris, Barbin et Thierry, 1668. Figures gravées par François Chauveau.
5. Edition particulièrement originale des *Fables* de La Fontaine, réellement exécutée à Tokyo, pour le compte de la librairie Flammarion. (Alain-Marie Bassy, *Les Fables de La Fontaine Quatre siècles d'illustration*, Paris, Promodis, 1986, p. 272)
6. Gregory I. Carlson の取りあげた 9 つの出版物のうち 3 つが、ラ・フォンテーヌの寓話集である。そのうち、ここに取り上げる版以外に挙げられているのは、J.-J. Grandville の挿絵版と G. Doré の挿絵版である。("Nice Great Moments in the History of Published Fable Illustration" in *Les animaux dans la littérature*, Tokyo, Keio University Press, 1997, pp. 105-123)

なお、この『寓話選』は、河鍋暁翠の挿絵が付けられていることから「河鍋暁斎・暁翠展」(2000年6月1日～7月2日 東武美術館)に展示された。(同展覧会図録, p. 126)

7. フランス国立図書館 BnF (Tolbiac, salle des réserves) 所蔵の版 (B.N. Rés.^oYe 225.) は縮緬本である。綴じられてはいないが 2 巻一緒に、固い厚表紙に挟み込み、さらに箱に入れられている。厚表紙、箱とも縮緬本と同じようにクレープ・ペーパー (縮緬紙) で覆われていて、その縮緬紙に描かれている画は「日本庭園に鳥」であったり、「前景に鳥、右上に花、川向うの遠景には山」、あるいは「鶴を大きく 2 羽手前において波と舟、上方に花と松の枝」であったりする。この縮緬紙と画は明らかに日本のものである。しかし、固い厚表紙の見返し内側には、セーヌ河の橋と河岸のブキニストをモチーフにしたデッサン画を背景に "PARIS SANS PAIR / BIBLIOTHEQUE DE PAUL LACOMBE" と印刷された ex-libris (蔵書票のラベル) が貼られていて、BnF 所蔵になる前のかつての所有者を示している。ex-libris の貼られている地の紙は紫に金の模様に入った洋紙で、箱の背には赤い皮素材の上に金文字で "FABLES DE LA FONTAINE / TOKIO 1894" とあり、その下に小さな金文字で "PETITOT" と読むことができる。さらに、箱に貼られた縮緬紙の画の折り返し部分に見られる絵師の名は、この版に挿し絵を描いた 5 人の誰とも一致しない。以上の理由から、これらの厚表紙と箱は (それを覆っているクレープ・ペーパーは日本のものであるが) 日本で制作されたものではなく、フランスでオーダーされた一種の個人製本と考え

られる。装丁師の名が PEPITOT なのかもしれない。事実フランスには、製本工芸の伝統があった。書物工芸の歴史上「(Jean Grolier (1479-1565)のおかげで) …ルネサンス期以後はフランスが製本工芸の発展の中心となり、現代美術の表現形式の一つと認められるまでに技術と芸術性を高めた…フランスでは、ごく最近まで版元製本は一般的なことにならなかった。薄い一枚続きの紙で中身をくるんだだけの〈仮とじ本〉を買い、アンカットのページを自分で切り開きながら読み、読み終わったものを蔵書として個人的に皮製本に仕立てさせるという習慣は、20世紀に入っても続いていたし、現在でも文学書の多くは仮とじ本のまま売られている。…」(折折久美子「装丁」世界大百科事典、平凡社、1993、16-p. 320) という背景を考えれば、この版を所有していた Paul Lacombe が、絹糸の束で綴じられただけの和装本を「仮とじ本」と考えて自分の蔵書に加えるために、厚表紙と箱をフランスで特注したとしても不思議ではない。

8. アン・ヘリング(「続・縮緬本雑考(1)」『日本古書通信』昭和57年9月号 pp. 12-14)によれば、明治20年代になるとすでに、日本の出版社と外国の出版社との間には「共同出版」とも呼べる協力関係が成立していたケースがあるらしい。明治時代の欧文和装本としてよく知られている「日本昔噺」シリーズの発行者、長谷川武次郎の弘文社は、明治20～21年頃から英国の Griffith Farran 社と「共同出版」をしており、その証拠として、「日本昔噺」シリーズの第15号 *My Lord Bag-O-Rice* の裏表紙の画が指摘されている。長谷川武次郎は、また、*Dichtergrüsse aus dem Osten* (明治27年) や *Tera-koya und Asagao* (明治33年) などの訳者兼監修者であった Karl Florenz 博士(ライプツィヒ大学出身)を通じて、ライプツィヒの Amelang 社と、ドイツ語版の出版物に関して緊密な協力関係にあった(アン・ヘリング「作品解説」、『ちりめん本と草双紙—19世紀後半の日本の絵入本』福生市郷土資料室編集、福生市教育委員会発行、平成2年、p. 44)。

ラ・フォンテーヌ『寓話選』の出版で Flammarion 社の果たした役割は判然としませんが、「特別注文」か「特約販売」であろうか。奥付にその社名が記されていないこと、発行・印刷者が長谷川武次郎ではなく曲田成であること、そして「著作者 馬留武黨」が翌年の明治28年に出版した *Fables choisies de J.-P. Claris de Florian, illustrées par des artistes japonais* には“LIBRAIRIE MARPON & FLAMMARION/ E.FLAMMARION SUCC^r/ PARIS”と表紙及び扉に記載があって、Flammarion の名は2箇所に入っているが、日本側の発行者「金光正男」、印刷者「山本鏡次郎」はラ・フォンテーヌ『寓話選』とは別人の名前になっていることなどから推測すると、長谷川武次郎の弘文社と Griffith Farran 社のケースのような共同出版では

なく、むしろ「著作者 馬留武黨」と Flammarion 社との個人的な連携から出版されたのではないかと考えられる。しかし、少なくともラ・フォンテーヌ『寓話選』の場合は、Florenz 博士と Amelang 社の関係ほどの緊密さがあったかどうかは疑問である。その理由のひとつは、*Dichtergrüsse aus dem Osten* の表紙画の Amelang 社の社名の描き込み方が、海に浮かぶヨットの帆に社名を入れる凝った図案なのに比べて、Flammarion 社の方は、その社名がたった1箇所しか記されていないうえに、あとからゴム印で押したのかと勘違いしそうなくらいそっけない書込みになっているからである。

9. 「縮緬本雑考」(上)(中)(下)、「統縮緬本雑考」(1)~(12)『日本古書通信』第457~652(昭和57年5月号~58年11月号)

アン・ヘリングは「国際出版の曙—明治の欧文革双紙」のなかで、次のように2冊の『寓話選』にふれている:「…ド・フローリアンとラ・フォンテーヌの仏文寓話に、梶田半古や河鍋暁斎の息女で、女子美術専門学校の教授となった河鍋暁翠らが日本風の挿絵をつけた大型和本は、明治28年頃に発行されている。ちょっと異色の一例であろう。」(『ちりめん本と草双紙—19世紀後半の日本の絵入本』福生市郷土資料室編集、福生市教育委員会発行、平成2年、p. 25)

10. 「縮緬本雑考」(中)(第458号 p. 3)
 11. 「統縮緬本雑考」(1)(第461号 p. 14)
 12. 序文の始めから狩野友信が紹介されている段落まで、及び河鍋暁翠が挿絵を描いた4つの寓話については日本語訳がある。及川茂訳「ラ・フォンテーヌ寓話抄」(『暁斎』河鍋暁斎研究会会誌、第21号、1984年12月、pp. 26-31)
 13. 本文中で省略した部分には、この版に挿絵を描いた5人の画家、河鍋暁翠、狩野友信、岡倉秋水、枝貞彦、梶田半古が紹介されている。

Kawa-nabé Kiyô-soui, (Fille et Elève du fameux *Kiyô-sai*, un des grands artistes du Japon moderne, célèbre par les dessins à l'encre de Chine qu'il a laissés, où il a fait une étude complète du corbeau), a tout naturellement choisi, entre autres fables; LE CORBEAU ET LE RENARD.

Kanô Tomo-nobou, un des représentants de la grande famille des *Kanô*, suffisamment connue des Amateurs d'Art pour qu'il ne soit pas nécessaire d'en faire l'éloge; nous montre dans les fables; LA GRENOUILLE ET LE RAT, LE COQ ET LA PERLE, pour n'en pas citer d'autres, qu'il est bien de la famille.

LES DEUX TAUREAUX ET LA GRENOUILLE, LE DRAGON À PLUSIEURS TÊTES ET LE DRAGON À PLUSIEURS QUEUES; et d'autres encore, ont été illustrées par *Oka-koura Shiou-soui*, qui appartient,

lui aussi, par son genre de talent, à l'école de *Kanō*.

Eda Sada-shiko, paysagiste de talent a eu l'heureuse idée de placer la scène de la fable, LE RAT ET L'HUÎTRE en face de île de *Enoshima*, connue de tous les collectionneurs d'estampes Japonaises, et ils sont nombreux, grâce au pinceau du célèbre *Ota-marō*, dont les oeuvres sont tant recherchées aujourd'hui, particulièrement celle à laquelle nous faisons allusion.

Enfin *Kadji-ta Han-ko*, Elève de *Yō-sai*, celui qui fut déclaré de son vivant, par l'Empereur actuel, le plus grand peintre de son temps ; s'est chargé de nous peindre LA CIGALE allant implorer LA FOURMI sa voisine ; il nous la représente si malheureuse, elle semble dans un si présent besoin qu'on ne saurait s'empêcher d'être ému en présence de cette grande infortune. Nous ne pensons pas que le sujet puisse être mieux traité. Toutes les fables illustrées par ce maître de grand talent, bien que jeune encore, sont traitées avec le même sentiment artistique(sic), qu'il sait imprimer à toutes ces oeuvres.

14. Il y a vingt-huit ans lorsque, jeune et plein d'ardeur, l'auteur du présent ouvrage débarquait pour la première fois au Japon, il était loin de se douter que ce pays enchanteur exercerait sur lui son charme, au point de l'amener à modifier complètement ses occupations habituelles, ses projets et son genre de vie même, et de faire de lui, non seulement un japonisant, mais presque un Japonais.

C'est qu'en 1886, à cette époque déjà lointaine où cette contrée merveilleuse se révélait à M. Pierre Barboutau, le Japon était encore le vieux Yamato. (Henri Vever, Préface, in Pierre Barboutau, *Les peintres populaires du Japon*, tome I, 1914, Paris, Chez l'auteur, 1, Rue Beautreillis, p. XIII)

15. [...] Enfin, il (P. Barboutau) est revenu au Japon pour la troisième fois(I) et s'y est mis en quête de documents nouveaux. (Yorodzou O-da, Introduction, *ibid.*, p. VII) このフランス語訳の序文 (Introduction) のすぐ後には、日本語で筆書きされた織田萬の序文が綴じ込まれている：「...更にその(浮世絵画家の伝記編纂の)完成を期せんが為めに三たび日本に渡来し新資料の搜索に努めたり」

この「三たび」の部分は織田氏の思いちがいで「4回目」である、とフランス語訳の序文欄外で訂正されている。

(I) Notre très honoré ami, Monsieur Oda, commet ici un lapsus. C'est

durant notre «quatrième» voyage au Japon, en 1913, pendant notre séjour de plusieurs mois à Kyoto, qu'il nous a fait l'honneur d'écrire cette introduction. (note de P. Barboutau, *ibid.*, p. VII)

16. [...] Ayant conçu depuis longtemps le projet d'écrire la vie et l'histoire de ses peintres préférés(de l'Ouki-yo-é), il n'avait jamais cessé de rechercher patiemment les documents graphiques et les éléments d'étude nécessaires, pendant les différents séjours qu'il fit au Japon, séjours équivalant à sept années de vie japonaise. (Henri Vever, Préface, *ibid.*, p. XIV)
17. *The Japan Weekly Mail : A REVIEW OF JAPANESE COMMERCE, POLITICS, LITERATURE, AND ART.* (YOKOHAMA, JUNE 6th, 1896) "LATEST SHIPPING" の項 : DEPARTURES. *Calédonien*, French steamer, 2,500, Blanc, 31st May, —Shanghai viâ Kobe, Mails and General. —Messageries Maritimes Co. PASSENGERS. DEPARTED. Per French steamer *Calédonien*, for Shanghai viâ Kobe : — [...] Messrs. J. Oda, [...], P. Barboutau, [...] in cabin.

この号に Barboutau の名前とともに載っている、“J. Oda” は *Les peintres populaires du Japon* に日本語で序文をよせている(フランス語訳付き)「織田萬」を指していると考えられる。ファースト・ネームのイニシャルは異なっているが「序文」には船旅でバルブトーと一緒にであったことが書かれているうえに、同氏の著書『日本行政法論』(六石書房、昭和18年)の「著者略歴」には「(明治)二十九年欧州に留学」と記されているからである。

なお、バルブトーが始めて来日したとされる1886年に発行された *The Japan Weekly Mail* の LATEST SHIPPING には、Barboutau の名を見つけることはできなかった。しかし、同紙は「...欠号が多く Shipping Intelligence(=Latest Shipping) といっても、一、二等客に限られ、乗客名簿が略されている号もあり、全体として誤植も少なくない。氏名があってもファースト・ネームが略されているような場合もある。」(川崎晴朗、HOTEL REVIEW '94. 1-36『私の築地居留地研究』下-2、著者発行、1995) とのことなので、バルブトーが同年に横浜から入国しなかったとは断言できない。

18. FABLES CHOISIES/ DE J.-P. CLARIS/ DE FLORIAN/ ILLUSTRÉES PAR DES ARTISTES/ JAPONAIS/ SOUS LA DIRECTION /DE/ P. BARBOUTAU/ TOKIO/ LIBRAIRIE MARPON & FLAMMARION/ E. FLAMMARION SUCC^r/ 26, RUE RACINE, PRÈS L'ODÉON/ PARIS.

第1巻は明治28年7月、第2巻は同年10月印刷・発行。

19. 各寓話に対応するプレイヤッド版の巻数と番号をカッコ内に挙げる。Le premier volume : I (Livre I-1), II (I-2), III (I-8), IV (I-3), V (I-12), VI (I-18), VII (I-20), VIII (II-3), IX (I-22), X (II-4), XI (II-6), XII (II-2), XIII (III-11), XIV (IV-9)

Le second volume : I (Livre II-15), II (II-14), III (IV-7), IV (III-9), V (II-12, 後半のみ), VI (IV-11), VII (V-5), VIII (VI-12), IX (VIII-9), X (VII-4, LE HÉRON LA FILLE の前半のみ), XI (XII-10), XII (IX-14, LE RENARD ET LE CHAT と題名が逆になっている), XIII (X-2), XIV (X-3).

20. J.-P. Collinet, *op.cit.*, p. LXIV

21. Que Chauveau ait placé l'homme au centre de l'univers de La Fontaine et au sommet incontesté de la hiérarchie naturelle des êtres, qu'il ait fait de l'ouvrage du fabuliste l'exercice d'un humanisme—sinon d'un anthropocentrisme—trionphant : cela risque d'étonner notre mentalité moderne [...] (A.-M. Bassy, *op.cit.*, p. 109)

22. *Ibid.*, pp. 132-136

23. [...] 印象主義が色と光の純粹に芸術上の運動だけではないように、ジャポニスムもその核心には芸術を超えた社会のあり方と結びつく新しい発想を持っていたのである。

ジャポニスムを擁護する人々が、日本の美術のある側面を強調し、新しいものの見方、考え方の伝播に利用したのは、たとえば以下の点においてである。

基本的に人間表現が主流であったヨーロッパの美術とくらべて、日本の美術は自然の主題、モチーフを非常に重要なものとして扱った。ヨーロッパの眼から見れば、日本は「自然主義」の国に映ったろうが、逆の見方をすれば、ヨーロッパが「人間主義＝ユマニスム」の文化圏である、という言い方もできる。問題は、このユマニスムが根底にキリスト教思想を持っていて、世界の秩序を人間中心に考えていたことである。キリスト教思想において人間を統括するのは神であるが、神とは、人間の姿を基に作られたイメージであり、世界は人間に近い順にヒエラルキーを構成していた。ヒエラルキーの低い動植物や山河などの自然物は、美術の中では軽んじられる歴史が長かった。このヒエラルキーを打ち壊すことは、すなわちキリスト教的な価値観を打ち壊すことに通じる。[...] 日本美術に見られる自然景観や動植物のモチーフは、古い秩序への疑問を持った人々によって、意図的に賞賛されたのである。(馬淵明子『ジャポニスム 幻想の日本』ブリュッケ、1997、pp. 24-25)

24. Pierre Barboutau (日本語表記としては「バルブト」のほうが正確であ

るが、ショヴォー、ウドリーなど他の人名の読み方も考慮して「バルブトー」とした)

この人に関しては情報が極端に少ない。筆者が調べた限りでは、フランスの百科辞典類にはその名前は見つからない。のみならず、その著書が2点収蔵されているBnFでも、同図書館所蔵の著書に関する記述(CATALOGUE GENERAL de la LIBRAIRIE FRANÇAISE, continuation de l'ouvrage Otto LORENZ, Tome XIV^e, Rédigé par D. JORDELL, Paris, Nilsson, 1901, p. 119)があるのみで、生没年すらわからなかった。BnF所蔵のバルブトーの著書とされているのは、次の2点である：

-Catalogue descriptif d'une collection d'objets d'art, rapportés de son voyage au Japon, par Pierre Barboutau, 1893. (8-V-24509)

-Les peintres populaires du Japon, Tome 1^{er} [1^{er} fascicule], 1914. (FOL-V-5424)

バルブトーについては、瀬木慎一著『浮世絵世界をめぐる』(里文出版、平成9年)の「海外の浮世絵 収集と展示 3 レイモン・ケクランとフランスのコレクターたち」の章に次のように書かれている。

PIERRE BARBOUTEAU ((生没年) 不明)

この人物ほど何一つ知られていない例は他にはない。1886年以降1913年まで日本に滞在し、多数の美術品を収集したと伝えられるが、日本にはわたしが調べたかぎりでは裏付ける資料は皆無である。わたしの調べは『写楽実像』に収録してあるので、ここに引用する。[...]

さて、このバルブトーなる人物のコレクションであるが、写楽、歌麿、北斎の三人に重点があり、とくに写楽の版画二十六点は驚異的である。ドイツの研究家 JULIUS KURTH が刊行した最初を誇るモノグラフィ SHARAKU (1910年)に掲載されている図版の多くはこれから転写されている。

総数約三千点と数えられる版画を主としたこのコレクションは、1904年にパリで売り立てられたものの、内容が不揃いなため失敗し、前記のように後にアムステルダムにまで運ぶなどして、全部が売却されるのに数年を要している。とはいえ、優れた部分もある大コレクションであったことは確かである。それにしても、所蔵家の実体が不明なのはどういう訳か、気になるところである。ケクランの広範囲の交際のなかにもこの人は入っていないし、ビングが催した「日本の晩餐会」にもその名は見当らない。(pp. 99-102)

25. 最後に、「不明」とされてきたバルブトーの生没年が判明したのでここに記しておく。(図版12)

Barbouteau 2367

Barboutau

Dix-septième Feuille

Le quinze septembre mil neuf cent seize vers dix heures du matin, est décédé en son domicile, 1 rue Beautreillis, Pierre Barboutau, antiquaire, né à Saint Serain sur l'Isle(Gironde) le vingt-sept avril mil huit cent soixante deux, fils de Dominique Barboutau et de Marie Peyroudes, célibataire. Dressé, le seize septembre mil neuf cent seize, dix heures du matin, sur la déclaration de Edgard Bara quarante ans, employé, 12 rue François-Miron et de Désiré Costil soixante deux ans, employé, 5^{bis} rue de Colombes à Asnières(Seine), qui, lecture faite, ont signé, avec nous, Paul, Joseph Désiré Dubure, adjoint au maire du 4^e arrondissement de Paris, Chevalier de la légion d'honneur 9/

E.Bara

Costil

P.J. Dubure

なお、このパリ第4区役所提供の acte de décès (死亡証書)には出生地が“Saint Serain sur l'Isle”とあるが、これは“Saint Seurin sur l'Isle”の誤記と考えられる。

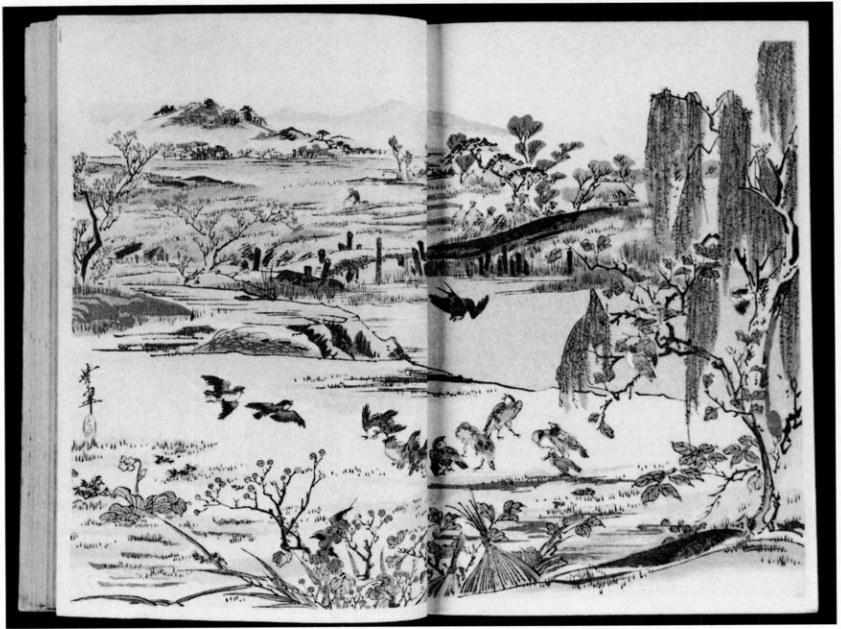
(本稿入稿後に入手することのできた、Mairie de Saint Seurin sur l'Isle 提供の出生証書によると、ピエール・バルブトーの父親の姓の綴りは“Barbouteau”であり、生年月日に関しても死亡証書には1862年4月27日とあるが、正しくは1862年5月27日である。2000年12月記)



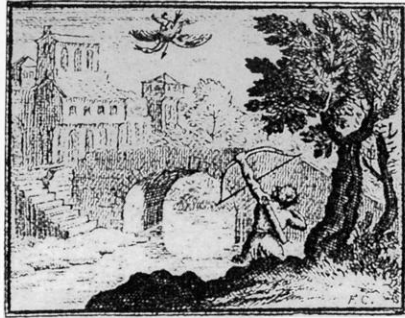
図版1 表紙(梶田半古)



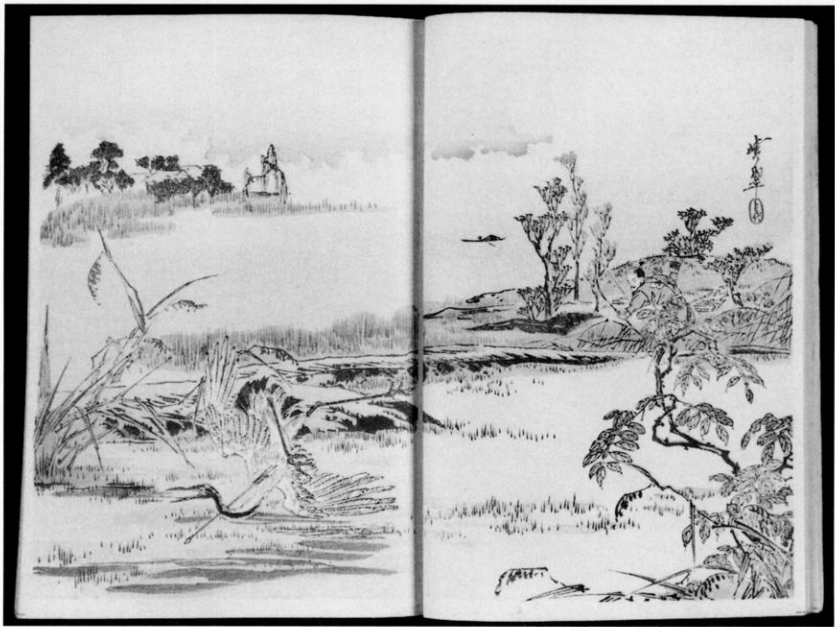
図版2 L'HIRONDELLE ET LES PETITS OISEAUX



図版3 「ツバメと小鳥たち」(河鍋暁翠)



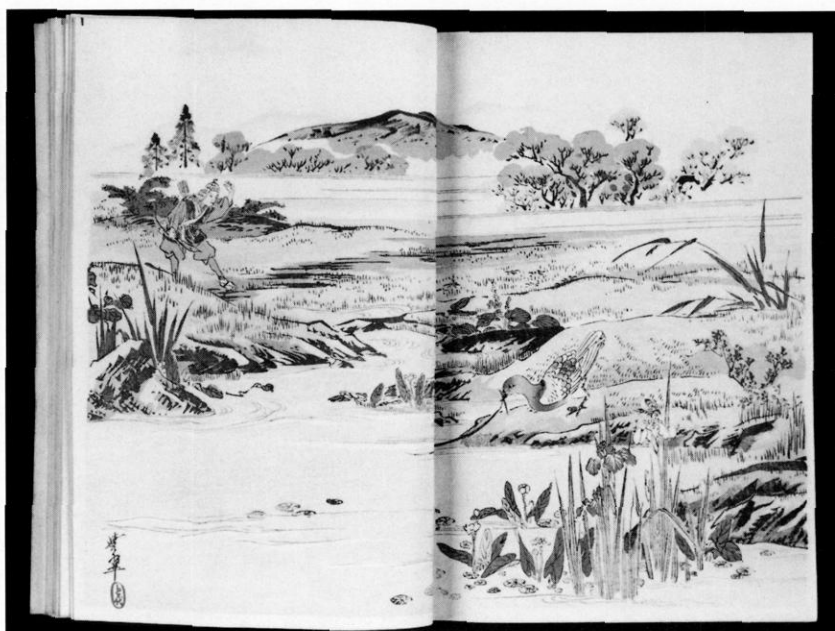
図版 4 L'OISEAU BLESSÉ D'UNE FLÈCHE



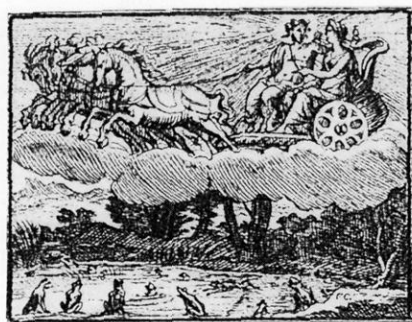
図版 5 「矢に傷ついた鳥」(河鍋晚翠)



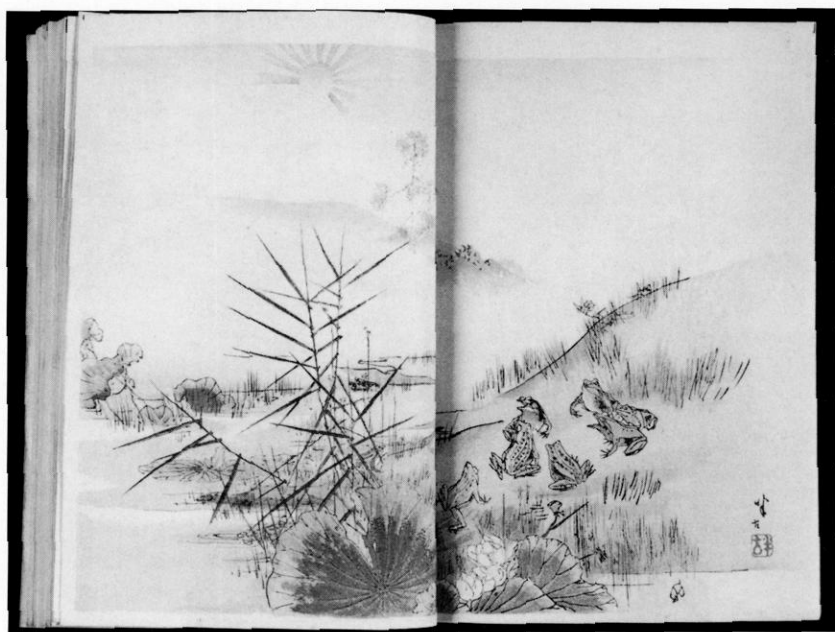
図版6 LA COLOMBE ET LA FOURMI



図版7 「ハトとアリ」(河鍋暁翠)



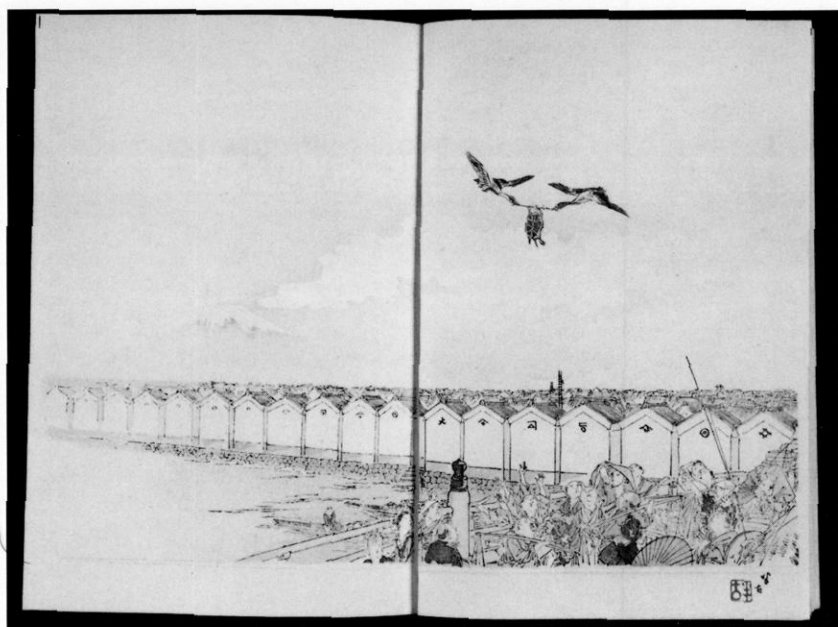
図版 8 LE SOLEIL ET LES GRENOUILLES



図版 9 「太陽とカエルたち」(梶田半古)



図版10 LA TORTUE ET LES DEUX CANARDS



図版11 「カメと2羽のカモ」(梶田半古)

